

東日本大震災における支援品の研究 —福島県双葉町の事例から—

川浦 瑞花

2011年3月11日、東日本大震災が発生した。震災の記憶と記録を風化させないためには震災像の解明が必至である。そのひとつの手段として、震災関係資料の実態解明が挙げられる。震災関係資料の収集・公開については神戸大学附属図書館震災文庫や阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター、長岡市立中央図書館文書資料室、福島県立博物館等が既に実行している。その中でも長岡市立中央図書館文書資料室は震災関係資料の整理作業を開始している。しかしそれは避難所資料を対象としたものであり、支援品に着眼したものではない。支援品という観点からの分析及び震災像の解明は未だなされていないのが現状である。

震災関係資料は多種多様であり、支援品はその一種である。これは震災時に被災地へ送られた品を指し、激励の品や慰問品と言い換えることが可能である。そこで、本研究の目的は、人と人との繋がりという観点から支援品を分析することにより、震災がどこのどのような人々に、どのような影響を及ぼしたのかを明らかにし、震災像解明の一助に資することとする。

本研究では、福島県双葉町役場埼玉支所及び旧騎西高校避難所に送られた支援品の中から、千羽鶴と寄せ書きを対象とした。これら支援品や、支援品に関わらず多様な震災関係資料に普遍的に利用できるメタデータを設計し、作成したデータベースから千羽鶴と寄せ書きの内容分析を行った。

整理作業として初めに、震災関係資料から千羽鶴と寄せ書きを抽出し、写真撮影と整理番号の付与を行いながらデータベースに登録した。この時、いずれの項目にも当てはまらない内容であっても、特徴となり得ることは全て備考欄に記入することとした。次に記入されたデータを元に分析を行った。その結果、作成者においては学校関係等の団体から支援品が送られる傾向にあることがわかった。作成地においては双葉町の避難先であり役場機能の移転先であった埼玉県や、姉妹都市のある京都府からのものが多数あった。このように、双葉町や埼玉県と縁のあるところから支援品が送られる傾向が見られた。

支援品には応援や励ましといったメッセージが込められている。それは言葉として付されていたり、或いは支援品そのものであったりする。未曾有の大震災が多くの人々の心を動かし、支援品を送るという行動を起こさせた。そのような支援品と、そこに込められたメッセージを通して見たこの事実こそが、人と人との繋がりという観点から読み解いた、震災像の一片であると言える。

(指導教員 白井哲哉)